

6期目の議会へスタート

皆さんの期待に答えて頑張ります

4月22日の鈴鹿市議選で、私は2641票の得票を得て、6期目の当選をさせていただきました。また森川ヤスエさんも4期目の当選、日本共産党市議団の2議席を守ることができました。定数32に7人オーバーというきびしい選挙でしたが、私はこれまでの6回の選挙の中で一番多い得票で、また森川さんは激戦の神戸地域でほぼ前回票を維持しての再選となりました。(写真は、選挙事務所にて妻と)



日本共産党へのご支持をいただいた市民の皆さんに、心からお礼を申し上げます。また、選挙戦を通じて私たちがうったえた政策・公約を、これからの任期4年の中で実現するために全力でがんばりますので、今後のますますのご支援をよろしく願います。

残念ながら、今回の選挙でも現有2議席の確保にとどまり、3議席への挑戦という課題は次回に先送りとなってしまいました。市民の皆さんからの「議員を増やして」との期待に答えられなかったことをお詫びし、「次は必ず」と約束させていただきます。

今回のいっせい地方選は、三重県では津市と四日市市で県会議席を復活し、また四日市市で1人増の3人、鳥羽市で1人、朝日町で1人の当選を得、前進しました。私もその一人として貢献できて、ほっとしています。

最後まで政策・公約訴えて



今回の市議選にあたって、日本共産党鈴鹿市委員会は、この4年間の市議団の実績をお知らせすると共に、市民アンケートで広く市民の願いや意見をきき、政策に反映させました。

市民の回答で多かったのは、何といても「増税や負担増を何とかし

て」「もう暮らしていけない」「国保税も介護保険料も高すぎる」という切実な声でした。また、「通学路の安全」「学童保育をつくって」「安心して過ごせる子育て支援センター」などの、子育てや教育への願いも、多く出されました。（写真は、加佐登会館での個人演説会）

「医者に行きたいけど、カネがかかるので」と

街頭からの訴えにも、多くの方が耳を傾けていただきました。稲生で石垣に座り込んで聞いていたお年寄りは、「少しの年金から介護保険を引かれて、その上にまた（後期高齢者医療）保険料を引かれるのか。わたしゃ膝が痛くて困るとるが、医者にも行かずにガマンしてる。ほんとに年寄りをいじめる政治や」と嘆いていました。

また、西部のあるお婆さんは、「息子が郵便局に勤めていたが、民営化で辞めさせられた。小泉がここに来たら殴ってやりたいわ」と怒り、「あんたらが頑張ってもらわんとアカン」と、励ましていただきました。

牧田のある奥さんは、「みんな名前をワーワー言うていだけやが、あんたはきちんと話してくれるので、よく分かったわ」と共感。あちこち行く先々で、いろんな方との出会いや交流がありました。

長尾東大阪市長、伊船新田に来援

私の親友で東大阪市長の長尾淳三君が、今回の選挙も応援に駆け付けてくれました。20日の伊船新田集落センターでの演説会で、地元町民80人を前に、「人口50万人の大都市で共産党員の市長ができたのは、政治の流れが変わってきているからで、滋賀県でも宮崎県でも、ここ三重県でもそんな時代になっている」「不公正や談合、土建屋や金持ちのための政治はもう続かない」と説きました。

長尾市長は、戦後ずっと市会議員を務めていた父親・一郎氏のことを紹介し、あのレッドパージの時代にも父親を支えた地元の住民は、「あのスジを通して頑張ってる長尾さんを落としたら、わが町の恥や」との心意気で、一度も父親を落選させなかったと述べ、同様に「石田を落としたら伊船住民の恥やと思って下さい」と聴衆に訴えました。

選挙の時だけでなく4年間ずっと頑張る議員です

私も長尾君の応援に意を強くし、こんな訴えをしました。

「どこへ行っても『頑張って』『石田さんガンバレ』と言われます。うれしいことですが、選挙の時はどの候補者も懸命にがんばってます。しかし選挙が終わって、肝心の議会に出てからどうかというと、あまり頑張らない議員も多くいるんです。何のために議員になるのか？議会でしっかり発言し、市民の声を届け、市政をチェックするのが、議員の本来の仕事でしょう。私は議会のたびに質問に立ち、毎回しっかり発言して20年間やってきました。選挙では頑張るが、議会ではあまり頑張らない、年に1回も質問しない、議案には何でも賛成、こんな議員ではせっかくの投票がムダになります。

私は議会に出ても頑張ります。だから選挙では、皆さんが頑張ってもらって、私を押し上げてほしいんです。私の話を聞いて、そうだと思ったなら、皆さんがどうか頑張ってください。」

長尾君の話も私の話も、いささか押し付けがましいような気もしましたが、それでも帰りがけに握手をかわす皆さんが、「わしも頑張るぞ」「頑張って投票するでな」と口々に言われるので、何か心が通い合ったような気分になりました。

選挙は民主主義の原点と言われます。民主主義とは「住民が主人公」ということで、候補者が主人公ではない、選ぶ側の住民こそが主人公なのです。

ずいそう

みんなが幸せになれる歌

6回目の選挙がやっと終わって、頭も体もクタクタになった。体の疲れはマッサージや温泉でほぐすとして、頭の疲れをほぐすには、底抜けに面白い本がいいと手に入れたのが、音楽家・宮川泰著「若いってすばらしい」（産経新聞出版）、副題が「夢は両手にいっぱい、宮川泰の音楽物語」。

宮川氏は昨年3月に75才で急逝されたが、本書は1年後の今年3月に出版された。日本音楽界の巨匠であるのに、テレビなどでダジャレや冗談を連発して有名だった宮川氏らしく、この本も全編ユーモアの固まりだ。宮川氏は中学のころから独学でアコーディオン、ピアノを弾き、ジャズバンドで活躍、60年代「ザ・ピーナッツ」を世に出し、数々のヒット曲、無数の編曲作品で、戦後の音楽界に大きな足跡を残した。私の年代ではザ・ピーナッツの曲の他には、ダークダックスの「銀色の道」、若いところでは「宇宙戦艦ヤマト」などが知られている。

世界中の人々が仲良くなれるような曲を作りたい

出たところ勝負、抱腹絶倒の音楽人生をふり返った宮川氏、本書の最後の方でちょっとまじめに、最近の歌謡曲について問題提起をしている。

「日本の歌謡曲にも1970年代あたりまでは非常に素晴らしい曲がありましたよ。それが徐々に減って行って、90年代には完全に今の状況が出来上がってしまった。今ヒットチャートに乗っている曲の大半は、おそらく数年後には誰も口ずさむことのない悲しい運命を辿っていることでしょう。」

「リズムは体を動かすけれど、心を動かすのはメロディです。今はリズムだけが氾濫していて、心に訴えてくる音楽が見当たらないのが残念です。」

「そんな中で僕の夢は、その曲を聴いたり歌ったりすることで、人々が信頼し合えるような、本当に平和を感じることができるよう、それは民族とか人種とかに関係なく、戦争とか犯罪といったものがいかにムダでつまらないかが分かって、そして世界中の人たちが本当に仲良くなれるような曲を、1曲、たった1曲でいいから残したいんです。」宮川氏自身が一番好きだったのは、本書のタイトルの曲である。あなたがいつか言ってた 誰にでも明日がある だからあの青い空を見るの 若いってすばらしい